

黒田正典先生の焦点＝応用心理学への道標

細江達郎（岩手県立大学）



表題は先生の「連続射殺犯」永山則夫の生涯についての論考（情熱の焦点）からの借用です。先生の音読名に掛けて、いつか使うときがあるかと思っていたのですが、そのときが来てしまいました。悲惨数奇の運命をたどった永山へのあたたかい目がそこにありました。先生は真の人間学者（ヒューマニスト）でした。接する人の内面をやさしく引き出し伸ばす、真の教育者でもありました。

先生は大正5年2月29日宮城県に生まれます。享年93歳になりますが、先生の誕生日から先生が自称しておりましたが、先生は23歳ということになります。先生は永遠の青年でありました。昭和15年東北帝大法文学部心理学科卒業の後、新潟大学教育学部教授等を経て、昭和41年東北大学教養部教授に就任、昭和54年定年退官まで多くの学生にその優れてあたたかい教育論により多くの学徒を指導されました。退官後、創設され岩手大学人文社会科学部教授として2年間指導にあたられ、短時日に研究の理論的支柱として、また若い学生への道標として人間的にも学問的にも大きな影響をあたえられました。大学退職後はかねての念願の私塾を開設し、さらに若い人材を先生の実験のもとに直接指導にあたられておりました。

先生のご専門は多岐にわたりますが、早くから筆跡学の泰斗として知られておりました。「書の心理—筆跡心理学の発達と課題—」（誠信書房・昭和39年）はこの分野の基本書となっております。使用筆記具に関わらず起筆に個人固有性があることなどの知見は多くの偽筆鑑定に影響を与えました。多賀城碑や伊達正宗の書の分析などによる歴史へのユニークな貢献も特筆されます。王羲之など書にまつわる理論研究も定評があります。またワープロ以前の時代ですが、カナタイプの字が一語ずつしか読めない問題点の解決のために、毛筆に倣いカナ字の撥ねを工夫した「ゲシュタルトカナタイプ」を考案するなどその応用の姿勢も独特なものがありました。

なによりも先生の研究の中心は人間教育と心理学の理論研究であります。戦後宮県県の教育研究所や高校教員としての勤務の後、新潟大学教育学部における16年の教育者、教育心理学者としての貢献は、仙台で私塾に集まった方々や、当時の教え子の皆様による「黒田先生を囲む会」の総意による平成16年に著わされた先生の警世の書「蘇れ！ 日本の教育」（博進堂）に集約されております。それは日本の教育の現状に対する先生の教育心理学者・教育者として多年にわたる一わたしの心理学8章—研究と実践からの悲痛な叫びでもありました。もちろん先生編著「教育心理学」（朝倉書店・昭和38年）を初めとする多くの教育心理学に関する理論書、実践書を背景とするものです。その基底となる思想は、最初の書「心の衛生：精神生活の了解と衛生」

(協同出版・昭和 28 年), 編著「創造性の心理学」(朝倉書店・昭和 46 年), 「若者のこころ: 情熱の焦点をさぐる」(産業能率短大・昭和 51 年) などに顕されている若い世代の創造性や情熱への信頼です。

戦後の高度成長期とそれに続く日本の教育界は, 学歴重視, 学力偏重に傾斜し, 先生の実想や主張は必ずしも注目されたとはいえませんでした。警世の書を頂いたおり, 先生は最近こうした考えに関心をもつ人がボツボツ現れているとうれしそうにお話しておられました。教育や子ども・青年の状態は決して改善されていない今日, 教育論・文明論としても先生の主張は貴重な功績として再評価されるものと思います。

先生は自分の研究分野を理論心理学と表現することを最もふさわしいと思っていたようです。学会では理論のセッションで多く発表しておられます。理論を正面から取り組むことが少なくなった近年の学界の動向もありますが, 先生の主張が必ずしも受け入れられず, 発表でも聴衆はわずかだったというときもあったようです。しかし「心理学ワールド」誌(2002)の巻頭言を飾るなど, その一貫した主張は徐々に高い評価を受けるようになっておりました。

先生は了解心理学から出発しましたが, それを遥かに凌駕する理論を展開しました。心理学の科学論また各種教育論が学史的に主観(主体)主義と客観(客体)主義の振り子を繰り返してきたこと, 学を志すものは極端に走らず, 共存, 尊重, 折衷に心することなど先生の主張の重みは大きいといえます。心理学の主観主義は「主観的」という表現から誤解されるので「主観化主義」というべきだと述べております。近年“perceived〇〇”という英語に「知覚された〇〇」という生硬な訳が当てられています, これは刺激実態をその人が認識している, つまり主観化しているということで, 「知覚」という訳がそのまま使われているようでは先生の観点から見て, 心理学の本質が十分理解されているとは思えません。また Windelband, W. の nomothetic と idiographic の二分法の中に先生造語の idiomodific (主体変様) 的認識こそ現実場面の課題に取り組む心理学の方向であることも強く示唆されました。社会的現実と直面したとき, それを単に客観的に研究調査するのではなく, 研究者自身がそれに関わり介入していく主体変様的な営みを求めるものです。これもまた応用心理学会が真摯に受け止めなければならない道標でもあります。(合掌)

昭和 12 年 3 月	第二高等学校文科乙類卒業
昭和 15 年 3 月	東北帝国大学法文学部心理学科卒業
昭和 20 年 9 月	東北帝国大学大学院特別研究生終了
昭和 20 年 9 月	東北帝国大学助手
昭和 24 年 3 月	宮城県教育研究所研究員
昭和 25 年 4 月	新潟大学教育学部(講師・26 年助教授・27 年教授)
昭和 41 年 12 月	東北大学教養部教授
昭和 54 年 4 月	岩手大学人文社会科学部教授
昭和 56 年 3 月	同定年退官
～平成 3 年	東北福祉大学特任教授
PC セミナー主宰など研究教育活動が続ける	
(昭和 42 年 12 月 文学博士「日本文学の筆跡心理学に関する基礎的研究」)	